

● 沖 縄

上 地 隆 裕

2019年度に於ける本県クラシカル楽壇は、総じて古典芸能の変わらぬ圧力に押されながらも、ひと頃の受難そして退行の時期を脱すべく、特に踏ん張った一年である。特に、と添えたのは、本年が「琉球王府時代に国劇として整備・演じられるになった」組踊（くみおどり）の創始（開祖は踊奉行の役職にあった「玉城朝薫」と言われる）後300年目を迎えるという記念の年だからである。

その演奏芸術界（クラシカル）への影響は大きく、マスコミ等の告知面でかなりのスペースを占めるため、独奏会を開く各種楽器の演奏家にとっては、広報活動面で支障をきたした。それに輪をかけ、事態を更に悪化させたのが11月末の「首里城」大火・炎上崩落そして焼失事件である。

そんな中で敢えて未来に通じる出来事を述べておきたい。一つは琉球交響楽団（以下RSO）の図抜けた活躍、もう一つは各分野の奏者たちが総意と工夫で創出した新しいコンサート・スタイル、の二点である。

RSOは定期シリーズ＝「SCHOOL CONCERT」（創立以来現在までに約100校を訪問）、「0歳児からのコンサート」（これまでに30回以上提供）、「大人のためのランチタイム・コンサート」を活動の中核に据え、オペラ全曲上演の伴奏を務めたり、大小のアンサンブルを編成して離島巡演を実施する等、将来の定期会員育成を狙った新しいスタイルを始動させた。そのような形で総体的なレヴェル・アップを図りながら、そこで得た力を、同団の真の実力を世に問う定期演奏会に集約し、楽員の士気（モラリティ）を高めようとする努力である。

同団は文句なしに本県アンサンブル界の看板楽団であり、これから更に飛躍が期待されるが、そんな折、遂に悲願の本土上陸（しかも東京のサントリー・ホールでの公演＝指揮に大友直人、ピアノ独奏に辻井伸行）が年末に決定。関係者の喜びもひとしおながら、「本県のオーケストラもようやくここまで来たか！」と県民からかつてないほど大きな注目を集め、期待を抱かせている。

次に二つ目の出来事だが、それは「声楽」「器楽」のジャンルに関係なく、同種楽器や異種声質等のグループで取り組んだ形の、いわば合同公演スタイルの登場だ。ざっと上げただけでも、クアトロ・バス・オキナワ（出演者8人全員がコントラバス奏者）、マリンヴェスタ（パーカッション演奏者達のみ）、クレオ・コンサート（男女各4人計8人の声楽家のみによる合同独唱会）、ピアノの響き（14人のピアニストが登場）等をはじめ、実に10団体以上を数え、新しい傾向として注目され、かつ活況を呈した。

外来で注目を集めたのは、まずオーケストラではハンガリーの地方都市ジュルを本拠地とする「ジュル・フィルハーモニー管」（指揮・B・カールマン）、室内楽では実力者で固めた「ヴェリタス弦楽四重奏団」、初登場では「ミュンヘン国際コンクールを制した”葵トリオ”」、同じく初顔のピアニスト＝ニューニュー（牛牛）らである。

また国産組では実力者の中丸三千絵が、ポピュラー小品集を

並べて聴衆を魅了。加えて常連組では、国立モスクワ音楽院日露交歓公演、トヨタ・コミュニティ・コンサート（指揮：川瀬賢太郎、P独奏：小曾根真）、沖縄交響楽団なども順調に定期公演の回数を重ねた。

その一方で、アンサンブルの分野（各ジュニア・オーケストラ）の公演が低調に終わったのは惜しい。

末尾として、本土に本拠を置く県出身の実演家、指導者の両面で活躍する面々を付記する。まずSpの砂川涼子（藤原歌劇団所属）、チェロの上地さくら（TVシリーズの「ミス・シャーロック」等の番組で演奏を指導）、ヴァイオリニストの上地実実（TVドラマ「G線上のあなたと私」等の番組で演奏、監修を担当）、更に今シーズンから読売日本交響楽団に迎えられたホルンの上里友二らの活躍が目立った。